

福島市湯野地区における果樹園芸農業の展開と近年の変化

手塚 章・岡本友志

キーワード：福島市，果樹栽培，複合経営

I はじめに

福島盆地は、福島県最大の果樹栽培集積地域で、モモ・リンゴ・日本ナシをはじめとして多種多様な落葉果樹を生産している。さらに、全国的にみても、福島県は上記の3作目について、モモの生産量が全国第2位、リンゴが第5位、日本ナシが第4位といずれも上位を占めている(平成6年「果樹生産出荷統計」による)。

他方、これら3つの主要果樹について、福島盆地内の分布を旧市町村別に検討すると、日本ナシが松川扇状地上の旧野田村・庭坂村・大笹生村に集中しているのに対して、モモとリンゴは福島盆地の中央部から北部にかけて広く分布し、両者の分布が空間的に重なり合っていることが分かる(第1図)。実際、福島盆地の果樹農家では、モモとリンゴを主要な生産物として組み合わせる場合が多く、その比率は農家によって決して一様ではないが、両者がともに大きな比重を占める果樹複合経営を行っている。モモとリンゴを中心とする落葉果樹の複合経営は、果樹栽培が急速な伸びを示した戦後の高度経済成長期以来の特徴であり、全国有数の果樹産地である福島盆地の地域的性格を形づくってきた。

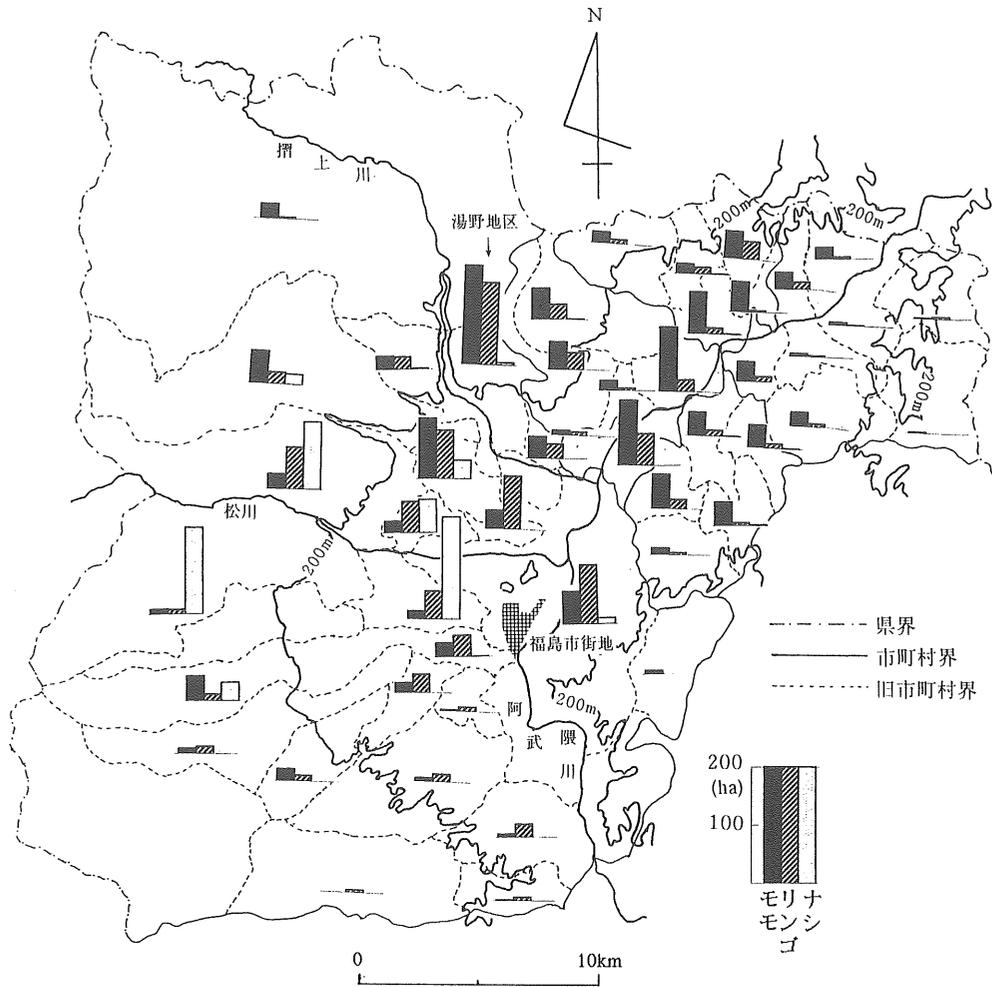
本稿で取りあげる福島市湯野地区にしても、従来から「温泉」印のモモが全国的に有名で、モモ産地としての印象が強いものの、基本的には一貫してモモとリンゴの複合経営が果樹農家の根幹をなしてきた。以下では、こうした落葉果樹の複合産地が、どのような地域的背景のもとに成長し、

また産地の維持発展をはかるべく、どのような変容をとげてきたかを検討することにしたい。

II 湯野地区における果樹園芸農業の展開過程

II-1 果樹園芸の導入と発展

湯野地区における果樹栽培の導入とその後の展開は、福島盆地の全般的な動きとほぼ対応している。すなわち、明治の中頃からかなりの発展をみせた日本ナシの栽培を別にすると、福島盆地の主要果樹(戦前においてはモモ・桜桃・リンゴ)が急速な成長をみせたのは明治末から大正期にかけてのことであった¹⁾。また、モモや桜桃に較べると、リンゴの普及は時期的に少し遅れていた。たとえば、「福島県統計書」に掲載されている果樹の樹数をみると、旧信夫郡と旧伊達郡の合計値(福島盆地の値にほぼ相当する)が、モモについては明治38(1905)年の4,294本から、5年後の明治43(1910)年には36,849本に急増し、大正3(1914)年には81,171本、大正6(1917)年には119,248本へと急速な伸びを続けた。同様に、桜桃も、福島県統計書に登場する明治43年の11,367本から、大正3年の25,851本、大正6年の42,319本へと急増している。ただし、モモは大正の後期から停滞に転じ、桜桃の樹数も緩やかな増加にとどまるようになった。これに対して、リンゴの樹数は大正3年においても4,328本にすぎず、ようやく大正6年になって17,953本、昭和3(1928)年に29,611本、昭和8(1933)年に36,050本、昭和12(1937)年には54,589本と着実な増加をみせた。



第1図 福島盆地における旧市町村別果樹栽培面積

(1995農業センサスより作成).

これら3つの果樹のうち、湯野地区にまず導入されたのは桜桃だったようである。湯野小学校に保存されていた文書によれば、最も古い明治36(1903)年の記録に、桜桃の出荷量が150貫とある²⁾。明治44(1911)年には桜桃の出荷量が4,000貫以上に達し、福島盆地における一大産地に成長したが、その後は増減を繰り返しながら2~6千貫の生産を維持した。安田(1938)によると、桜桃の主要分布域は瀬上から飯坂にかけての摺上川氾濫原で、一面の桑園が桜桃園に改植されたという³⁾。湯野地区は、この桜桃産地の西の

ずれに位置した。

モモが湯野小学校の記録に現れるのは、明治40(1907)年からである。また、生産量が急増するのは大正期に入ってからで、とくに大正5(1916)年からは毎年1万貫を越える生産量を記録している。これに対して、リンゴは大正4(1915)年になって初めて樹数10本として現れる。その後の伸びも急速とはいえず、昭和の初め頃も3~4千貫の生産量にとどまっていた。リンゴ生産が急速な伸びをみせたのは、1930年代にはいつからで、矢来地区を中心にして、山麓緩斜面にリンゴ栽培

地帯が形成された⁴⁾。

このように、第二次世界大戦以前から、果樹栽培は湯野地区の農業で一定の地位を占めていた。しかし、当時の農業が養蚕と米作を中心としていたことには変わりはなく、そのことは昭和5（1930）年に発行された「湯野村彙報」に記された次のような統計数値によっても明らかである⁵⁾。

「主要農産 米75,866円・麦4,500円・桑54,700円・桜桃9,900円・桃23,000円・柿2,640円・養蚕による繭15,260円・蚕種23,767円」

Ⅱ-2 複合果樹産地の形成とその後の動向

第二次世界大戦後の高度経済成長期を通じて、湯野地区は果樹作主体の農業へと急速な変貌をとげた（第1表）。戦中・戦後の食糧増産により桑畑は1950年までに23ヘクタールへと減少していたが、その後も果樹園への転換が進んで1960年代には完全に姿を消した。また、サツマイモ畑や麦畑として利用されていた土地も次々にモモやリンゴの樹園地に転換され、その結果、1965年には全耕地面積の半分以上が果樹園によって占められるようになった。

モモとリンゴの複合産地という性格は、この時期から明確にみてとれる。1956年から1962年まで

の湯野農協取扱販売額の推移をみると、モモとリンゴが2大農産物であり、その販売額はつねに拮抗していた⁶⁾。また、桜井（1965）は湯野地区の穴原集落について農家ごとに土地利用構成を図化した⁷⁾が、そこでも少数の第二種兼業農家を別にすると、モモ園とリンゴ園がほとんど全農家にみられ、両者が主要生産部門として組み合わされていたことを示している⁷⁾。

したがって、現在みられる複合果樹産地としての姿は、戦後まもなくのこの時期に形成されたと基本的にいうことができる。その後の展開は、モモ園とリンゴ園の新設という量的拡大の動きであり、このことは個別農家のレベルでも、また地区全体の事業としても取り組まれてきた。

第1表からも推察できるように、果樹園の用地はまず普通畑や桑畑の転換によって確保されたが、1960年代の後半からは、水田を果樹園に転換したり、林野を開墾することで樹園地の拡大が目指されるようになった。とくに1966～68年の農業構造改善事業により、北部山地の標高250～450メートル地帯では、4か所（合計85.5ヘクタール）に樹園地が造成され、主としてモモが植えつけられた。1965年から1975年にかけてのモモ園面積の急増と全耕地面積の増加は、この開墾事業の成果を反映している。しかし、1980年代にはいつてか

第1表 福島市湯野地区における農業の推移（1950～95年）

（単位：ヘクタール）

	1950	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995
農家数(戸)	432	426	411	404	389	367	353	279	263
耕地面積	349	365	355	392	418	408	399	410	380
果樹園	53	142	183	246	306	315	309	332	314
モモ	17	63	93	150	208	215	177	171	166
リンゴ	30	75	84	90	91	97	127	155	138
水田	136	131	122	119	80	71	61	55	51
桑畑	23	4	1	0	0	0	0	0	0

注) 1990年と1995年については販売農家の数値である。

(農業センサス調査による)。

らは、モモ園の面積が減少に転じ、逆にリンゴ園の面積が増加したために、一時は2倍以上に広がった栽培面積の格差が、ふたたび拮抗するにいたっている。こうした栽培面積の消長は、その時々々の市況を反映するため、多かれ少なかれ他の複合果樹産地にも認められる。湯野地区の場合は、ちょうどそれが山林開墾事業や水田転換事業の時期と重なったために、振幅が著しく増したということであろう。

Ⅱ-3 近年の変化

湯野地区では、1964年に湯野農業協同組合が第1回朝日農業賞を受賞した。これは、果樹産地としての形成期にあたる1950年代に、湯野農協が中心になって共同防除や共同選果事業を推進し、いち早く先進的な果樹産地という評価を得たためである⁸⁾。当時の湯野地区では、果樹作を選択的拡大部門として農業所得を飛躍的に増加させることを目指していた。1961年に策定された「湯野農業振興10か年計画」には、水田の樹園地化と山林の開墾によって、農家一戸当りの果樹園面積を大幅に拡大させることが目標として掲げられた。

このような目標は、1960年代の後半から70年代の前半にかけて実現された。果樹農家の平均栽培面積は、モモとリンゴを合わせると約1ヘクタールに達するようになり、労力的な面からも土地的な面からも、さらに大幅な拡大は望めなくなった。この点で、標高250～450メートルの山地斜面に造成されたモモ園は、平地に較べて約2週間の生育差があるため、農繁期の開花期や摘果期、収穫期の労力分散に役だったという。

大幅な量的拡大が望めなくなった1980年代以降は、果樹栽培のいわば安定期といえようが、モモ園の老朽化が進行するなかで、モモの栽培面積は着実に減少しつつあり、リンゴに改植される果樹園が目だっている。とくに開墾事業で造成されたモモ園が、果樹の老朽化に加えて、サルやクマなどの被害を受けるようになり、現在では荒れ地化しているところが少なくない。

こうして近年では、量的拡大にかわって、品質

の向上が果樹作の主要な目標ということが出来る。湯野地区では、1963年からモモの無袋栽培を実施しているが、1973年からは独自の糖度基準を設けて、特選品の「サンピーチ」を銘柄化するなど、品質の向上に取り組んでいる。これに呼応するように、品種の移り変わりも著しい。リンゴの場合、「祝」や「あさひ」といった早生品種が、戦前から1960年前後まで湯野地区を特徴づけてきたが、その後「紅玉」や「ゴールデン」に変わり、近年では「ふじ」が他を圧倒している。また、モモに関しては、かつての主力品種だった加工用の「大久保」や「砂子早生」が姿を消しつつある。福島盆地は総じて遅出しのモモ産地という特徴があり、湯野地区においても現在の主要品種（白鳳、あかつき、まさひめ、川中島白桃、ゆうぞら）のうち、お盆前に出荷の最盛期を迎えるのは「白鳳」だけにすぎない⁹⁾。

Ⅲ 果樹園芸農業の生産構造：四箇集落の事例

Ⅲ-1 戦後における果樹作の変化

事例地区として取り上げた福島市湯野地区にある四箇集落は、摺上川北岸に位置し、農業依存度の高い農家が多く存続している集落の一つである。自然条件的には、摺上川の氾濫原に位置し、生産力的に比較的高位な土壌地域であると考えられる。この地区の果樹生産は、戦前の養蚕経営からの移行によって始まったものである。1960年には販売農家24戸中専業農家が17戸、第一種兼業農家が4戸であったのに対し、1995年には販売農家21戸中専業農家が10戸、第一種兼業農家が8戸であり、兼業化が進行している。しかも現在、後継者層に農業専従者が非常に少なく、高齢化が進んでいる。このように厳しい条件におかれているが、21戸中専業農家・第一種兼業農家を合わせて18戸に達するという事は、この地域の農業が健在であることを示している（第2表）。

また、1960年には水田が12.8ヘクタール、果樹が10.4ヘクタールであったものが1995年には水田5.4ヘクタール、果樹25.1ヘクタールになってお

第2表 福島市湯野地区四箇集落における農業
経営の推移 (1960年および1995年)

		1960	1995
農 家 数		24	21
専 業 農 家 数		17	10
第一種兼業農家数		4	8
耕地面積	計 (ha)	26.5	31.3
	田 (ha)	12.8	5.4
	果樹 (ha)	10.4	25.1
リンゴ	栽培農家数	18	18
	栽培面積 (ha)	5.5	9.3
モモ	栽培農家数	20	21
	栽培面積 (ha)	4.9	14.5

(農業センサス調査による)。

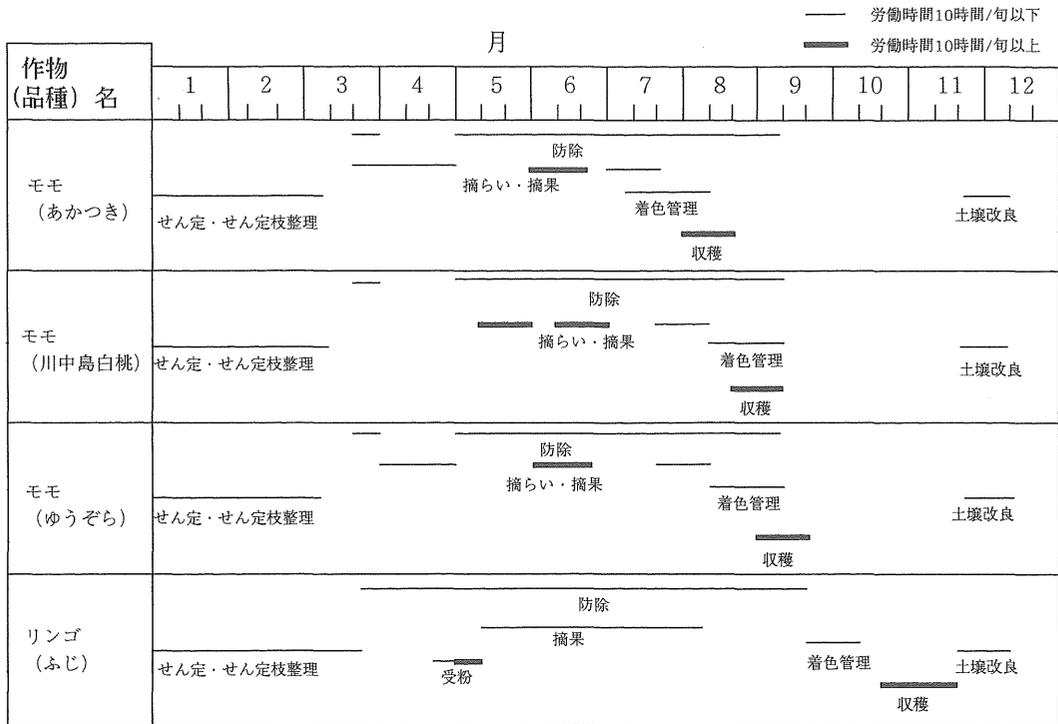
り、水田が7.4ヘクタールの減少、一方果樹が14.7ヘクタールの増加となっていて、水田から果樹園に転作が進む一方で、果樹園自体も新規に開かれていることが分かる。一戸当りの平均耕地面積は約1.5ヘクタールであり、その内訳は果樹120アール、水田25アール、その他5アールとなっている(1995年)。湯野地区全体では平均耕地面積約1.4ヘクタール(果樹120アール、水田20アール)であることから、湯野地区の標準的な集落といえる。全21農家のすべてがモモを栽培しており、18戸がリンゴを栽培している(第2表)。1995年時における果樹栽培面積(モモ14.5ヘクタール・リンゴ9.3ヘクタール)も考慮すると、この集落の最重要果樹がモモであり、リンゴがこれに次いでいる。

このように四箇集落は、最重要果樹であるモモと副重要果樹であるリンゴとの複合経営を行い、そしてそれらが農業所得の大半を占めることに特徴づけられる地区である。またこの地区の特徴として、果樹の品種が多岐にわたっていることが挙げられる。リンゴについては、ふじ・つがるを始め、一般に2品種以上を複合経営に取り入れているが、品種の多様性はモモについて特に顕著である。あかつき¹⁰⁾・まさひめ¹¹⁾・ゆうぞら¹²⁾等の奨励品種を中心として、他に川中島白桃¹³⁾・黄金桃・白鳳¹⁴⁾・日川白鳳等4～7品種に及ぶのが普通である。一般に落葉果樹地域では稲作との

複合経営が定着しているが、四箇集落では稲作は行われているものの、その農業所得に占める地位はかなり低いものである。当地区では、モモ・リンゴの複合経営によって農業経営の安定化を図っているものと考えられる。モモ・リンゴの他には、ブドウや桜桃が栽培されているが、耕作規模は小規模にとどまっている。桜桃は農業経営の多様化と経営基盤の安定化のため、近年新しく出てきた作物である。第2表によるとブドウ・桜桃をはじめとする、モモ・リンゴを除く果樹園面積の合計は1.3haであり、全果樹園面積のわずか5%を占めるに過ぎない。

また、1960年代後半の補助事業¹⁵⁾により北原北方の山地斜面にモモ園が開墾されたが、現在はこの地区の農民により経営されていないことが判明した。

第2図に、モモ・リンゴの主要品種における一般的な栽培暦を示した。1月から順にみると、1、2月期にせん定・せん定枝整理を行う。現在では、モモの開心自然系整枝において、2本主枝とする方法が行われている¹⁶⁾。次にリンゴについては、自家受粉しないため、4月下旬から5月上旬に人工受粉を行う。5月中旬から6月下旬にかけては、摘らい・摘果が行われる。この作業が行われる時期は、収穫期と並んで多忙な時期である。摘らいは、花の数を70%程度減らすことで、1955年頃までは20%程度しか実施されていなかったが、現在では一般的となった作業である¹⁷⁾。摘果は摘らい後、3回程度行う。この後、以前は袋掛けの作業があったが、1960年代前半に栽培の省力化を図るために、無袋栽培が採り入れられた。このことは、品質及び味の向上にもつながった。現在袋掛けをする品種はモモの山根白桃くらいである。収穫期は、モモの8月から9月中旬とリンゴの10月下旬から11月中旬であるが、この時期には大部分の農家で臨時雇用を用いる。その他、共選場での仕事も生産者が行う。複数の果樹を多品種にわたって栽培する場合、労働力配分の適切性が重要な問題となる。第2図によると、農繁期は主に摘らい・摘果の行われる5月中旬から6月下旬にかけて



第2図 モモ・リンゴの主要品種の栽培暦

(福島県農政部農業改良課の資料より作成)。

と、モモの収穫が行われる8月から9月中旬とリンゴの収穫が行われる10月下旬から11月中旬であることが分かる。その中にもあっても、モモにおいては収穫期の比較的早いあかつきから川中島白桃、さらに晩生種のゆうぞらにかけて収穫期は分散されており、さらにモモより収穫期の遅いリンゴを採り入れることにより、労働力の分散が図られている。

Ⅲ-2 土地利用の概況

土地利用調査は1996年7月3日および4日に実施した。調査範囲は四箇集落の一部である。調査範囲の中には四箇集落の21ある農家のうち18戸が含まれ、それらは神社・公民館を挟んで、路村状に分布している。非農家の宅地は一件のみである。商店・駐車場等の都市的土地利用は見られなかった。

土地利用を概観すると、果樹ではモモ・リンゴ、そして水田の3種類が大半を占めることが分かる。その中でも、特にモモが卓越しているが、それらは主に摺上川沿いの砂質域に集中している。この摺上川沿いの地域では、西部に比較的大きな水田、そして若干のリンゴ・ブドウ園を含む他はモモが卓越している。

リンゴについてはモモの次に広い面積を占め、集落沿いの道路の北側(粘土質域)で多く認められ、土壌が砂質である摺上川沿いではほとんど見られなかった¹⁸⁾。摺上川沿いに若干分布しているリンゴ園は、老朽化もしくは忌地現象の著しいモモ園の交替果樹であると考えられる。

自然条件に対応してモモとリンゴの栽培地域が分化する一方、宅地に近接した地域にリンゴ、離れた地域にモモが卓越しているとも見える。これは、より集約的であるリンゴを宅地付近



第3図 福島市湯野地区四箇集落の土地利用 (1996年7月)

(現地調査により作成).

に、粗放的であるモモを宅地から離れた地域に栽培することにより、労働の省力化を図ることができるからである。

三番目に広い面積を占める水田については、摺上川の北側、特に集落北側の地域に分布していて、分布域はリンゴとほぼ重複する。また、面積的にはそれほど多くないが、桜桃・ブドウ・イチジク・柿も認められた。桜桃は前述のように、近年導入された新しい作物である。高速道路沿いに大きな圃場が一つあるが、小さなものが農家の周辺

に若干認められた。ブドウの圃場は4ヶ所で、それらは散在している。ブドウの品種は聞き取りによると、巨峰や高尾が多いそうである。

家庭菜園以外の普通畑は全く認められなかった。ちなみに荒地としたものの中には果樹を伐採し、植えかえる予定の土地が含まれている。

Ⅲ-3 果樹作農家の経営特性

第二次世界大戦前、この地区の農業経営は養蚕に代表されていた。果樹栽培は主として戦後に発

展したもので、水田からの転作が果樹園の増加をもたらした。現在の果樹生産地域が形成された。

現在の農業経営としては、モモを主、リンゴを従とし、若干の水田稲作を組み合わせる形態が主である。平均耕地面積は約1.5ヘクタールであるが、中には2ヘクタールを超える農家も存在する。労働力は高齢者を中心としており、2、3人で経営されている。

この20年来、モモとリンゴを主体とする農業経営に変化はないが、品種の変遷は非常に激しい。モモは、1950～60年代に加工用の大久保・福光が中心であったが、早生種や現在主流を占める品種のもととなった白鳳等を経て、現在では奨励品種であるあかつき・まさひめ・ゆうぞら、そして川中島白桃を中心とし、それらがほぼ均等な比率で栽培されている。一方リンゴについては、モモ程の激烈さはないにせよ1940～50年代にかけて中心だった祝・朝日から、スターキング・ゴールドデリシヤスを経て、現在ではふじが非常に高い比率を示している。

出荷形態としては、個人出荷が一部の農家で行われているものの、共選場からの共同出荷が主流であり、このことは特にモモにおいて顕著である。以下では代表的な事例として4つの農家を取り上げ、それらに共通する農業経営の特徴を示すことにしたい。

1) A農家

この農家の経営耕地面積は、モモ130a、リンゴ40aの計170aであり、面積的にはこの地区で比較的規模が大きな農家に属する。水田は経営していない。基幹労働力は、世帯主とその妻、世帯主の母の計3人である。さらに収穫期には100時間程、臨時雇用1人が加わる。この臨時雇用は青森県からの出稼ぎである。戦前は養蚕¹⁹⁾・そして普通畑で野菜・麦類を栽培していた。戦後になり、1950年頃から果樹栽培を始めた。モモとリンゴの複合経営はその当時からのことである。

モモの品種変遷をみると、1950年頃、大久保・福光を10a栽培していた。以後砂子・倉方(1955年頃)となり、その後高陽白桃、その後白鳳(1965

年頃)、そしてあかつき(1969年頃)と主力品種が変化してきた。同様にリンゴは1952年頃、自給用としてインド・国光(10a)を始め、以後朝日・鳴子、その後ふじ・さんさに変化してきた。

1972年には、水田を30aブドウ園(巨峰)に転換している。当時ブドウの出荷は東湯野農協を経由していた。しかし1982年にそれをさらにリンゴ園(ふじ)に転換し、現在ではブドウ栽培を行っていない。

また、1966年には標高の高い茂庭地区でモモ(1ha)を始めた。この時の品種は大久保・高陽白桃・馬場白桃・岡山白桃等であった。やがて1983年には連作障害²⁰⁾を回避するためにそれらをリンゴに代えた。最初はつがるを栽培していた。しかしつがるの経済性の低さから、品種をふじに代えたが、あまり高品質のものができない(小玉になる)ことや宅地から離れていて、かつ山道であるという不便さから、1994年には栽培を中止している²¹⁾。

現在のモモ栽培の品種別内訳は収穫期の早い順に、日川白鳳25a、白鳳15a、あかつき30a、まさひめ6a、川中島白桃35a、黄金桃10a、ゆうぞら20aであり、奨励品種を中心に多岐に渡っている。同様にリンゴ栽培は、ふじ²²⁾35a、さんさ5aというように、ふじが主となっている。

収穫されたモモとリンゴは、95%以上が農協の共選場から出荷される。

2) B農家

この農家の経営耕地面積はモモ90a、リンゴ50a、水田20aの計160aであり、この地区の標準的な経営型とすることができる。基幹労働力は、世帯主とその妻、世帯主の父親の3人であるが、世帯主が主な労働力となっていて、妻と父親はそれに付随する仕事を行っている。さらに収穫期には娘が1ヶ月程度臨時雇用として加わる。また摘らい・摘果・摘花の時にも雇用する。この農家が果樹栽培を始めたのは1937年頃であり、最初はリンゴで、規模は10a程度だったという。その後1949年頃モモを始めた。当時モモ園の規模は20a程度であった。

モモの品種変遷をみると、1949年頃の福光・大久保（20a）から始まり、以後倉方早生・砂子早生（1953年頃）、その後白鳳・小平早生・岡山白桃（1965年頃）、その後ネクタリン（1969年頃）、あかつき（1975年頃）と主力品種が変化してきた。リンゴは1937年頃の祝から始まり、以後スターキング・ゴールドデリシヤス（1960年頃）、王林・つがる・ふじ（1970年頃）と変化した。

A農家同様、1966年には標高の高い穴原地区に70aのモモ栽培を始めた。1983年に連作障害を回避するためにそこをリンゴ園に転換した。リンゴの品種はつがるであった。しかしながら、あまり高品質のものができないことや宅地から離れていて、かつ山道であるという不便さから、今年限りで栽培を中止するそうである。1960年代後半の補助事業の際、四箇地区からは5戸の農家が北原北方の山地斜面にモモ園を開墾したが、すでに4戸が耕作を放棄し、このB農家が最後だそうである。

現在のモモ栽培の品種別内訳は収穫期の早い順に、日川白鳳9a、白鳳8a、あかつき27a、川中島白桃19a、ゆうぞら27aと、多岐に渡っている。同様にリンゴは早生種であるつがる10a、王林6a、ふじ34aであり、ふじが主となっている。

収穫されたモモ・リンゴはそれぞれ8%、20%程度が贈答用として直売され、残りは共選場から出荷される。

3) C農家

この農家の経営耕地面積はリンゴ80a、モモ70a、水田50a、桜桃5aの計205aであり、この地区では大規模な農家に属する。基幹労働力は、世帯主とその妻の計2人である。さらに収穫期には息子夫婦が臨時雇用として加わる。戦前は養蚕を行っていたが、戦時中は麦・豆・さつまいも等を栽培した。そして1955年に、食料事情の安定とともに果樹栽培としてモモ・リンゴを開始した。

モモの品種変遷をみると、1955年頃の水密で始まり、以後天津・福光・大久保、その後白鳳（1965年）、あかつき（1970年）、川中島白桃・ゆうぞら（1975年）と変化してきた。リンゴは昭和30年頃

の祝・朝日から始まり、以後紅玉・スターキング・ゴールドデリシヤス（1965年）、王林・つがる・ふじ（1970年）と変化した。

現在のモモ栽培の品種別内訳は収穫期の早い順に、白鳳20a、あかつき20a、川中島白桃15a、ゆうぞら15aであり、多岐に渡っている。同様にリンゴ栽培は王林・陽光・あかねが計20a、ふじ60aであり、ふじが主となっている。桜桃は6年前に始められたもので、生食用の佐藤錦である。

収穫されたモモ・リンゴはそれぞれ5%、10%程度が贈答用として直売され、残りは共選場から出荷される。米についても、自宅で消費する以外で余った場合、共選場から出荷している。

4) D農家

この農家の経営耕地面積はリンゴ60a、モモ60a、水田45aの計165aであり、この地区の標準的な経営型とすることができる。基幹労働力は世帯主とその妻の計2人である。大正時代から1947年まで、この農家では桜桃²³⁾を栽培していたが、その後モモ・リンゴに移行した。リンゴが導入されたのは1935年頃のこと、モモは1952年頃であるという。

モモの品種変遷をみると、1952年頃の福光・大久保で始まり、倉方早生・砂子早生、その後川中島白桃・白鳳・ゆうぞら・あかつきと変化してきた。リンゴは1935年頃の祝から始まり、以後スターキング・ゴールドデリシヤス・紅玉、ふじと変化してきた。

現在のモモ栽培の品種別内訳は収穫期が早い順に、白鳳15a、あかつき15a、川中島白桃15a、ゆうぞら15aであり、多岐に渡っている。またリンゴ栽培はふじが大部分であり、つがるが少量栽培されている。

収穫されたモモは50%が贈答用として直売され、残りは共選場から出荷される。この比率は他の農家と比較すると、直売率がかなり高くなっている。またリンゴは、つがるが共選場から出荷されるが、ふじは贈答用として直売される。リンゴについてもモモと同様、直売率がかなり高く、四箇集落の中では特異な例といえる。

Ⅳ むすび

以上では、福島盆地の果樹園芸農業を特徴づけるモモとリンゴの複合経営について、とくに福島市湯野地区における状況を、歴史的背景と現在の農業経営という2点を中心に考察してきた。そのなかで重要と思われるポイントを整理すると、以下のようなだろう。

(1) 現在みられるようなモモとリンゴを中心とする果樹産地が形成されたのは、第二次世界大戦後のことである。とくに1950年代と1960年代には、果樹園の面積が急増して、耕地面積の半分以上がモモ園とリンゴ園に占められるという果樹地帯の農業景観が成立した。しかし、モモとリンゴの栽培に関しては、戦前期からかなりの発展がみられ、落葉果樹の栽培について多くの農家に経験の蓄積があった。

(2) 1970年代後半からは、果樹園面積の増加がほとんど見られなくなった。しかし、経営内容を検討すると、モモ園からリンゴ園への転換が進行するとともに、モモ・リンゴの両方について品種の変化が著しい。こうした傾向は、果樹園面積が頭打ちの状況下で農業所得を向上させるため

に、経営の集約化・作物の高級化への道がたどられてきた結果とみることができる。

(3) 果樹作農家の経営内容をみると、モモ・リンゴの2作物を組み合わせていると同時に、とくにモモについては数多くの品種(5~6種類)を組み合わせて栽培しているのが普通である。こうすることで、果樹作にかかわる諸作業の時期的な集中をふせぎ、農業労働の季節的な平準化をはかっている。しかし、モモの品種についていえば、早生種によい品種がみあらず、中生種と晩生種に特化した遅出し産地という特色がある。しかも、こうした傾向はますます強まりつつある。

(4) 土地利用の大半が樹園地化してから20年以上を経過しているため、樹園地の老朽化や病虫害の発生が大きな問題になりつつある。急傾斜地や遠隔地など条件の悪い圃場は、放棄されて荒地化している場合も多くみられる。また、農業労働力の高齢化も進んでおり、後継者不在が深刻な問題として意識されている。したがって、これまで果樹産地として安定的な経営を維持してきたが、経営主の高齢化にともなう世代交代期の動向が大きな課題として横たわっている。

現地調査のさいには、四筒集落の多くの方々にご協力をいただいた。また、福島県庁、福島市役所、新ふくしま農業協同組合をはじめとして、関係諸機関で資料を提供していただいた。とくに湯野在住の秋山政一先生には、貴重な資料を見せていただいた。なお、土地利用図の製図は、本学の宮坂和人技官にお願いした。以上記して、厚くお礼申し上げます。

【注および参考文献】

- 1) 菅野康二(1958):福島盆地に於ける果樹栽培. 東北地理, 10(2), 16-22.
安田初雄(1939):福島盆地の景観. 地学雑誌, 51, 381-387.
- 2) 湯野小学校郷土誌の資料については、現在『湯野農業史』をご執筆中の秋山政一先生に、貴重な資料を見せていただいた。詳細な統計表は、後日刊行される『湯野農業史』に掲載されよう。
- 3) 安田初雄(1939):前掲1), p.385.
- 4) 桜井(1965)では、明治20年代にリンゴ栽培が開始され、当初からリンゴが多かった点に特色があると記されている。しかし、この記述を支持するような資料・文献は、見いだすことができなかった。
桜井秀三(1965):福島盆地における果樹栽培の展開過程. 人文地理, 17, 150-168.
- 5) 福島市史編纂委員会(1983):『福島の町と村Ⅱ(「福島市史」別巻Ⅵ)』, 福島市, 499p.
- 6) 秋山政一(1964):変ぼうする農業の一例——飯坂町湯野地区にみる—— 福島地理論集, 7, 16-19.

- 7) 前掲 4), p.158.
- 8) 朝日新聞社(1964):『前進する農民——朝日農業賞・七集団の実態報告——』。朝日新聞社, 6-22.
- 9) 品種別にみたモモの販売実績(1995年分)を,農協出荷量の多い順にあげると以下ようになる。あかつき(39.5万ケース);川中島白桃(21.3万ケース);白鳳(13.7万ケース);ゆうぞら(10.9万ケース)。また,特選品である「サンピーチ」としては,川中島白桃SPが2万ケース,あかつきSPが1.5万ケース,ゆうぞらSPが1.2万ケース出荷された(以上,新ふくしま農業協同組合・湯野総合支所資料による)。
- 10) 白桃に白鳳を交配した品種で,1979年に命名発表された。濃厚な食味を持ち,着色・日持ちにも優れている。
- 11) 21・18(品種名)にあかつきを交配した品種で,1992年に種苗登録された。収穫時期の点であかつきと川中島白桃のつなぎ品種としてJA新ふくしまモモ専門部会から奨励されている。
- 12) 白桃にあかつきを交配した品種で,1981年に命名登録された。着色に優れ,食味は極上にランクされる。品質・食味の観点から標高200m以内での栽培がJA新ふくしまモモ専門部会からすすめられている。あかつき・まさひめ・ゆうぞらの3品種は,JA新ふくしまモモ専門部会の奨励品種となっている。
- 13) 長野市川中島の池田正元氏が発見した偶発実生である。栽培性に非常に優れ,中晩生種として増殖されている。
- 14) 白桃に橘早生を交配した品種で,1933年に命名発表された。味の良い中生種。
- 15) JA福島の資料によると,1965年に北原北方の山地斜面に農地が開墾された。これにより標高60mから600mまでに及ぶ産地ができ上がり,山地においては収穫が10日間程平地より遅れるため労力の分散につながった。
- 16) 1963年に福島県園芸試験場により従来の3本主枝仕立てより仕立て法が簡便で,農家が理解しやすく,かつ生産性が高く高品質生産が見込まれる樹形として,2本主枝仕立てが考案され,その後の基本樹形として普及した。
- 17) JA福島の資料によると,摘らいの効果は果実肥大だけでなく,摘果労力の分散にも非常に効果的であり,モモ・リンゴ等の摘果が集中する時期の労力分散に大きく寄与している。
- 18) 福島県史(1965年)によると,土壌水分の不足しやすいところでモモが多く,リンゴが少ない。さらに優良なモモ園であるための条件として土壌成分に石灰・カリウム・苦土が豊富であることが挙げられる。逆に水分供給の多いところでリンゴが多い。しかしながら,福島盆地の果樹栽培分布はこうした土壌条件に完全に支配されているものではない。
- 19) 福島県史(1965年)によると,摺上川の氾濫原においては一般的に桑から桜桃,そしてリンゴというように栽培作物が変化してきた。
- 20) モモは果樹の中では連作障害(忌地現象)が生じやすい作物に属する。
- 21) 他にも,山地の気候的不利条件(霧が出やすい・風が強い)や,さらに6~7年前からはサル・クマ等による被害も原因となっている。
- 22) 福島県経済農業共同組合連合会の資料によると,飯坂地区において,ふじのような晩生品種(11月中旬頃収穫)では,秋冷が遅いため十分な成熟日数が得られることから味の良い良質果が生産される。飯坂地区で生産されるサンふじ(銘柄)は,主要市場に広く知れ渡っている。
- 23) 1930年代まで福島盆地は桜桃の産地であったが,傷みやすい・樹齢が比較的短い・収穫期が早く農繁期と重なる等の理由により,リンゴに代わった。